

Kirsner の「偶然性」再考

葛 西 清 蔵

0：筆者は(2007)において Kirsner (1977) の、受動態は「偶然性」の意味をもつ、という主張は不適切で、これはむしろ Bolinger の ‘affect’ の問題としてあつかわれるべきだと主張した。本稿は、Kirsner の ‘accident’ (偶然性) を主張する根拠が曖昧であることを確認しようとする。つぎのような順序で議論を進める。

- (1) Kirsner の主張
- (2) Bolinger の主張
- (3) 検討
- (4) まとめ

(1) Kirsner の主張

Kirsner (1977) は (1a、b)、(2a、b) から(3)を導き出す。

- 1.a ?Nureyev was seen by thousands to dance at the concert hall.
b Nureyev was seen by a reporter to leave by the side door.
- 2.a ?Roosevelt was heard to declare war on Japan.
b Roosevelt was heard to curse under breath.

3. 受動態は、能動態にはない、「偶然性」の意味をもつ。

これが、(1a)、(2a) は許容度がややさがり、?がつく理由である。以下では

これをめぐって検討をする。ここでは、(1a)、(2a)ともに許容する者もいることを示している。また Kirsner (1977) にはつぎのような例がある。

4.a Henry saw the accident. (i.e. an unexpected event)

b ?Henry watched the accident.

まず、(4b)で、accident が偶然のできごとであるから、それを予期しているようにじっと見ることはありようがないから許容度がおちるのは理解できる。しかし (1a)、(2a) の?と、(4b) の?はおなじ性質のものであろうか。また、ここで注目したいのは、その予期しない出来事が見えたという意味で see が許容されていることである。(日本語では「見た」というより「見えた」とするほうが適当であろう。)

(2) Bolinger の主張

Bolinger は基本的に受動態は affect されるもの、つまり何らかの形で影響を受けるものが主語になるとする。つぎの例をみよう。

5.a *He was approached by the train.

b He was approached by the stranger.

Bolinger は (5b) で stranger は panhandler 物乞いかもしれないので、なにかの精神的な影響を受けることがありうる。それにたいして (5a) で汽車が来るのは当然で、来ることによって何ら影響を受けることわない、これが二つの文の判断のちがいである、とする。Kirsner からすると、汽車が来ることは予期されたことであるが、物乞いと思われるものは突然、予期もしないのにあらわれる、このことが二つの文の判断のちがいということになるであろう。汽車は時刻にしたがってうごくものであり偶然に来ることはありえない。したがって非

文となる、というわけである。これらの例は Kirsner の主張を支持する。

(3) 検討

(3:1) Kirsner の問題点

さきに見た Kirsner (1977) の (4a) と (1b) を比べてみよう。

- 7.a Neureyev was seen by a reporter to go by the side door. (=1b)
- b He saw the accident. (i.d. unexpected event) (=4a)

Kirsner の主張のように (6a) の was seen は「偶然」の意味をもち、また (6b) も許容されるものとする、つぎのような可能性がでてくる。

- 7. 受動態が「偶然」の意味を持つというのは、むしろ動詞そのものよりも、他の共起している要素から帰納的に推測される、

ということである。

(3:2) 問題点の検討

(7)のように考えると、Kirsner & Thompson (1976) のつぎのような例も難なく説明される。

- 8.a I saw a flash of light.
- b ?I watched a flash of light.
- c I watched the flash of light.

(8a、b、c)では、一瞬のひらめきに対して、それがたまたま見えるということ

はあっても、それをジッと見ることは難しい。しかし予想されるひらめきをじっとみることはいうる。これがそのまま許容度の差につながっている。ここで重要なことは動詞とそれに共起している要素 see に対する a flash、watch にたいする the flash との関係でその文の許容度がきまる、ということである。⁽¹⁾

このように考えると、(1a、b)の許容度の違いは、じつは saw に対して was seen が「偶然」の意味をもつというのは、むしろ、その文の他の要素、by a reporter, by the side door が was seen が「偶然」の意味をもつようにしているのではないかとさえ予想させる。上で見た (8c) が許容されるのは、目的語の the flash が watched のもつ意味と会うからであるように。(4a) の能動 (saw) でも、(1b) のような受動 (was seen) でも「偶然」的な意味をもつということは、まさしくこのことを裏づけているように思われる。以上のことは (7)を支持することになる。

(4) まとめ

ここで、以上のことを参考にしつつ、まとめとしたい。荒木には次の (9a) の例がある。

9.a Nureyev was seen to leap on the stage. (荒木 p. 186)

b ?Nureyev was seen by thousands to dance at the concert hall. (= 1a)

c Nureyev was seen by a reporter to leave by the side door. (=1b)

(9a) は許容されるというが、そうだとすると (9b、c) にみる「偶然性」によるちがいは説明できなくなる。つまり、受動態が「偶然性」の意味をもつ、ということはやはり一般性がない、ことになる。to leap on the stage が完全に意図的なものであり、偶然とは考えられない。もともと受動態が偶然性を意味するとすると was seen をふくむ (9a) は許容されるはずがないからである。

ということになると、受動態が「偶然性」の意味をもつというのは、当てはまらないことになる。むしろ、「偶然性」は共起する要素によるのであって、受動態は、あくまで Jespersen は受動態となるさまざまな理由をあげているが、彼がいうように 'the greater interest felt for persons' p. 121) とみたほうが正当であろう。Kirsner の主張には、はっきりとした根拠はない。やはりこの種の問題は Bolinger の 'affect' のなかで説明されるべきであろう。

注

- (1) 動詞の性質が共起する要素で決まるということは次の沢田でも支持されるであろう。「"I saw the flash" の場合、「閃光」は瞬間的に消え去って縞物なので (=完結的)、saw も完結的となる。また、"I saw the moon." の場合「月」は継続して空に存在するものなので (=非完結的) see も非完結的となる。」

参考文献

- 荒木一雄（編）1986『英語正誤辞典』研究社出版
- Bolinger, D. 1975 'On the passive in English' *The First Locus Forum*: 57-80
- Chomsky, N. 1973 'Conditions on transformations' Anderson, S. and R. Kiparsky (eds.) *A Festschrift for Morris Halle* Holt, Rinehart and Winston
- Chomsky N. 1977 'On WH movement' Culicover, P. W. et al. (eds.) *Formal Syntax* Academic Press
- Deane, P. D. 1991 'Limits to attention: A cognitive theory of islands phenomena' *Cognitive Linguistics* 2: 100-111
- Erteschik-Shir, N. and S. Lappin 1970 'Dominance extraction; a reply to A. Grosu' *Theoretical Linguistics* 10: 81-96

- Grosu, A. 1972 The Strategic Content of Island Constraint Working Papers in Linguistics Ohio States Univ.
- Jespersen, O. 1956 Essentials of English Grammar George Allen & Unwin Ltd.
- 葛西清蔵 2007 「Kirsner の「偶然性」について」『文化と言語』67: 39-49
- Kirsner, R. S. 1977 'On the passive of sensory verb complement sentence' LA 8: 173-179
- Kirsner, R. S. and S. A. Thompson 1976 'The role of pragmatic inference in semantics' Glossa 10: 200-240
- 沢田治美 2009 「英語知覚表現の完結性と非完結性をめぐって」田中・神崎(共編)『英語語法文法研究の新展開』英宝社